

本論文は、後期中世シエナの政治の在り方と社会の構造、両者の関係を解明しようとしたものである。史料は、ラテン語・イタリア語の遺言書、公証人文書、都市条例、裁判記録、信心会関連史料など多岐に渡り、著者が20年間通ったシエナ国立古文書館所蔵の手書き羊皮紙文書も含まれている。著者は「公共善」をキーワードに、都市の政治理念と都市住民の社会関係を、五つの章に分けて検討している。

第一章では、都市条例などの規範史料を基に、シエナ住民の社会関係の基礎をなす行政上の「地理区分」と法的な「身分」が明らかにされる。当時の行政区は、旧市街区を中心に、その周りを、新市街区、市壁外のマッセ、コンタードが順に取り囲む同心円構造をしていた。城壁内は三分区によって三つに区分され、各三分区は、最小の行政単位ポポロ区に区分されていた。ポポロ区は小教区であり、軍事・行政・課税・祝祭の基本単位でもあった。住民の法的身分については、市民権を持たない者たちもいた。女性や子供は夫あるいは父の保護下にあり、課税台帳に載らない貧者や賃金労働者、従者、奉公人、召使も市民としての権利を行使できず、娼婦、奴隷、ユダヤ人、病人は、公的市民生活から排除すべき「劣等市民」と位置づけられていた。

第二章では、都市条例や公証人の「覚書」、書簡などの史料を基に、シエナ住民たちがどのような団体に加わり、誰とどのような関係を有し、その人間関係がどのような意味をもっていたかが検討される。ここでは、家族・親族組織、職業団体、遊興団体、信仰団体という四種類の団体が詳細に分析され、後期中世において、このような「団体」組織が重要性を増し、都市当局によって都市秩序を築くために利用されていたことが明らかにされている。

第三章では、下層の住民の社会関係を探るために、シエナ国立古文書館所蔵の14世紀裁判記録が利用されている。犯罪に関わる裁判の証言には彼らの直接的な言葉が記されており、擁護と告発の言葉のやりとりの中に、近隣の間人間関係が浮かび上がっている。ここでは、暴力や犯罪の主たる誘因として、女性の場合は性的品位に関わる中傷、男性の場合は誠実さや勇気、価値観に関わる侮辱が目立つことが指摘されている。

第四章では、シエナの重要なモニュメントであり、社会関係の結節点である公共建築物に焦点が当てられる。13・14世紀シエナでは、美しい市門、市壁、市庁舎などの公共建築物が建てられ、秩序だった美しい都市空間が作られた。著者は、とりわけ「広場」の役割を重視し、シエナの中心広場であるカンポ広場を、支配空間、商業空間、社交空間、聖なる空間として分析している。

第五章では、シエナ住民の心を捉えていた水と血、聖母マリア、狼のイメージが検討される。都市当局は13世紀以降、聖母マリアを領主と位置づけ、狼を都市のシンボルとしたが、都市住民の社会関係においてマリアが重要となるのは、宗教家や慈善施設によってその慈愛が広く知られるようになった後であり、狼のイメージもそのまま都市住民に受け入れられたわけではないことが指摘されている。

本論文は、大量の文献と広範な一次史料に基づく優れた研究である。その最大の価値は、後期中世シエナの社会を具体的に描き出した点にあるが、中世シエナの人々の心性や社会関係を扱った初めての本格的な研究である。本論文には、わずかではあるが、概念規定が必ずしも十分ではないと思われる箇所や理解が容易でない表現が見られる。しかし、いずれも本論文の価値を大きく損なうものではない。

従って、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値すると判断した。